

## 勇美記念財団

### 平成19年度 市民講座アンケート集計報告

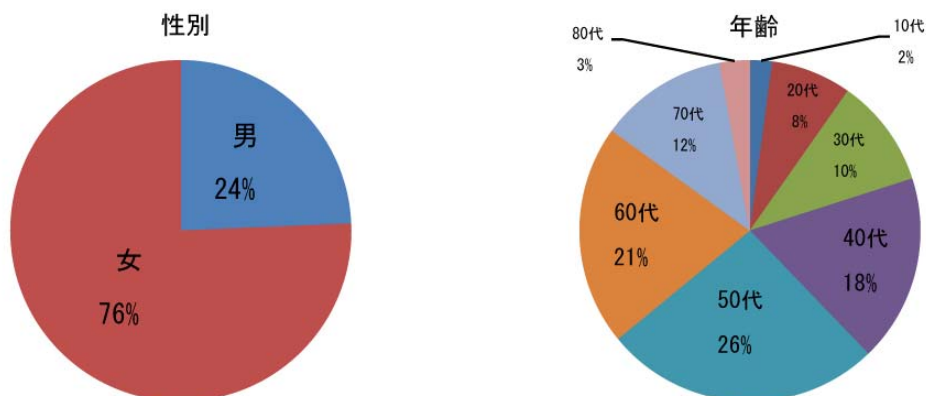
本財団では、一般市民の在宅医療への理解を促し、その啓蒙・普及に貢献する「市民講座」の開催を支援しています。平成19年度には、全国各地で開催された12の市民講座に対し、助成を実施しました。参加された方々にアンケートを行い、人々が在宅医療に対しどのような意識を持っているか、また自らの最期についてどのように考えているか、調査を行いましたので、ご報告いたします。

#### 【助成対象となった市民講座】

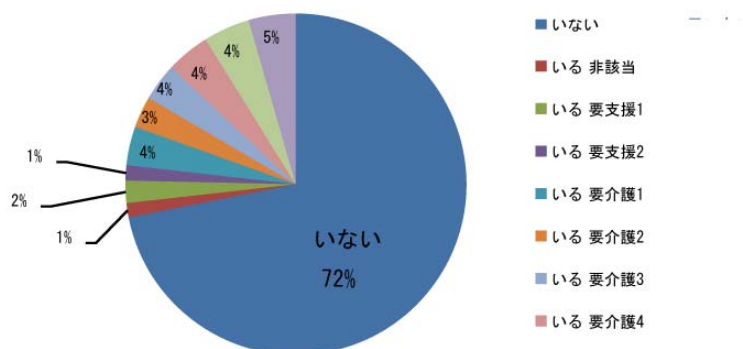
- ・口腔ケアステーションを立ち上げよう！ ～歯科衛生士単独訪問の道を拓く～  
(平成19年8月5日・東京都・草の根歯科研究会主催)
- ・城南ホスピス緩和ケアのつどい ～よりよいコミュニティケアを目指して～  
(平成19年7月28日・東京都・城南緩和ケア研究会主催)
- ・できるかぎり家で過ごしたい ～その願いをかなえる在宅ホスピスケア～  
(平成19年9月1日・愛媛県・バテル三番町クリニック、松山バテル病院主催)
- ・住み慣れたところで最期まで  
(平成19年9月～・栃木県・NUCS 栄養診療所、NPO 在宅医療を支援する会主催)
  - 第一回 歴史的建造物に癒される
  - 第二回 古典音楽と歴史的建造物に癒される
  - 第三回 歴史的景観に癒される～旧例幣使街道を歩く
  - 第四回 蔵座敷で味わう栃木の素材～玄米・みそ・醤油・葱・干瓢・そば～
  - 第五回 自分で治す新しい癒しの在宅医療
- ・「終わりよければすべてよし」を観て、自分について考えよう！  
(平成19年10月6日・三重県・みえ生と死を考える市民の会主催)
- ・「終わりよければすべてよし」上映会 (平成19年10月7日・青森県)
- ・口腔ケア学習会 (平成19年10月11日・神奈川県・横浜市緑区歯科医師会主催)
- ・地域で支える緩和ケア (平成19年10月28日・岩手県・一関在宅緩和支援ネットワーク主催)
- ・続・高齢社会を生きる～老いてからの過ごし方～  
(平成20年2月17日・兵庫県・患者のウェル・リビングを考える会主催)
- ・認知症ケアのチームアプローチ ～行動心理象徴のある方とご家族の支援～  
(平成20年2月23日・東京都・ミシガンネット主催)
- ・介護をささえる、家族をささえる  
～医療・介護ニーズが高い在宅療養者と家族への支援～  
(平成20年3月1日・東京都・日本在宅医療・在宅介護家族の会主催)
- ・「認知症サポーター養成講座」 (平成20年3月9日・静岡県・日本在宅医学会主催)

## 1. 参加者の概要

40～60 代の女性を中心に幅広い層が参加



Q 介護をしている対象者はいますか？



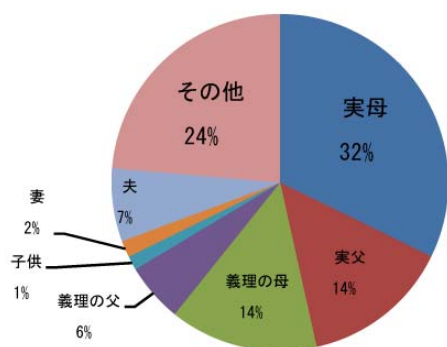
40～60 代を中心に、幅広い年齢層が参加。女性が多く、全体の約 4 分の3を占めました。横浜市緑区歯科医師会主催「口腔ケア勉強会」においては医師・歯科衛生士など専門職の参加が多く、男女比はほぼ半数ずつ、40～50 代の現役世代が中心でした。一方で患者のウェル・リビングを考える会主催「続・高齢社会を生きる」においては、60～70 代の方々の参加が目立ちました。

介護の経験者は全体の 38%。日本在宅医学会主催「認知症サポーター養成講座」は参加者の半数近くが介護経験者であり、自らの問題として強い関心を寄せていることが窺われました。

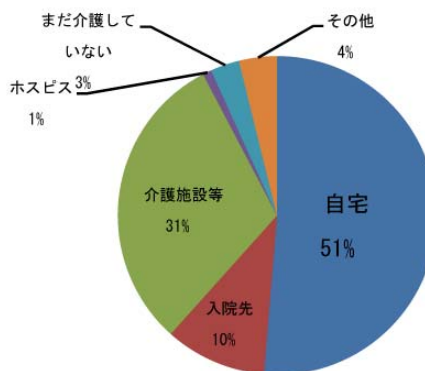
## 2. 介護の実態について

約7割が介護に何かしらの悩みを抱えている

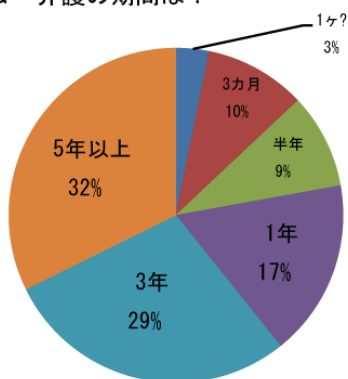
Q 介護の対象者との関係は？



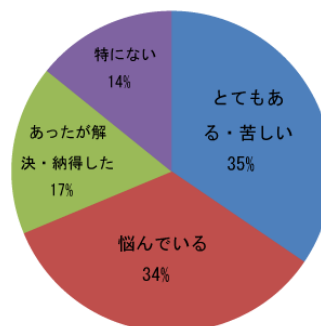
Q 介護している場所は？



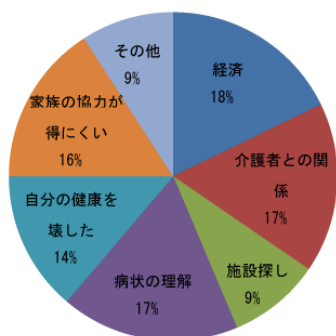
Q 介護の期間は？



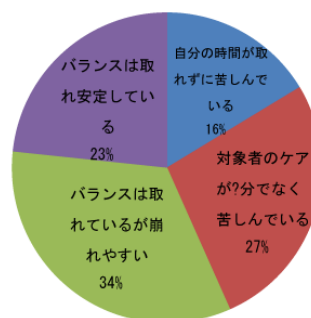
Q 介護していて感ずる困難は？



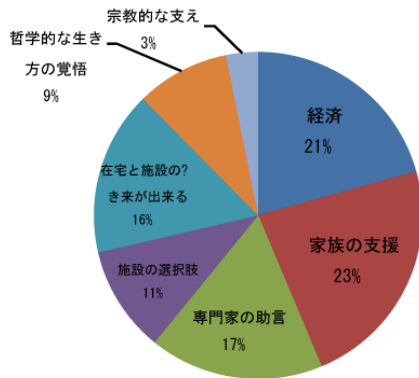
Q 困難の内容は？（複数回答可）



Q 介護の対象者のケアとあなた自身の生活の  
バランスは取れていますか？



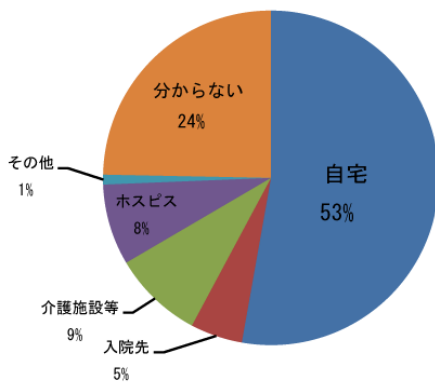
Q 介護と自分の生活の両立を助けるものは何ですか？（複数回答可）



実際に介護をされている方へ、その現状や課題についてさまざまな質問を行いました。まず介護の対象者は実母が最も多く、続いて実父、義理の母、義理の父と続いています。その約半数は介護を自宅で行っており、次に多いのが介護施設でした。

介護していて感じる困難については、「とてもある・苦しい」または「悩んでいる」と回答した人が合わせて7割近くにのぼり、多くの人が悩みを抱えている実態が示されました。困難の内容はさまざまですが、中でも「経済的な問題」「介護者との関係」「病状の理解」「家族の協力が得にくい」といった回答が目立ちます。

Q 介護の対象者が最期を迎えるのに希望している場所はどこですか？



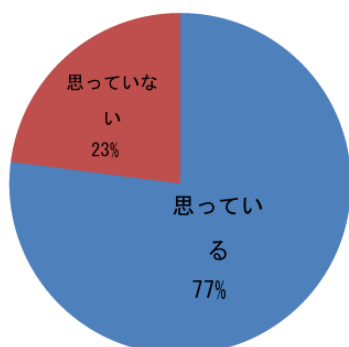
介護と自らの生活とのバランスについては、「バランスはとれていて生活が安定している」と回答したのは全体の約4分の1。「バランスは取れているが崩れやすい」とする回答が最も多く、何とかバランスを保ちつつもどこかで不安を抱えながら介護をしている実態が示されました。「介護と自分の生活との両立に必要なものは何か」の問いについては、「家族の支援」が最多。経済的な問題や専門家の助言の不足を指摘する回答も目立ちました。

また、「介護している対象者が、どこで最期を迎えることを希望しているか」という問いについては、「自宅」が半数を占める一方、本人の希望が「わからない」という回答も少なくありませんでした。

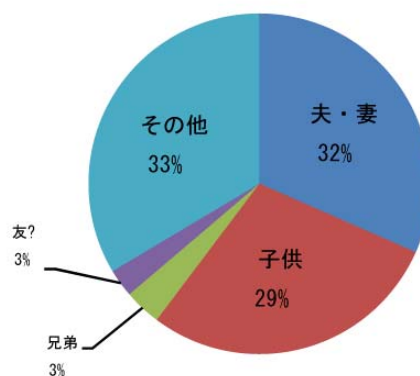
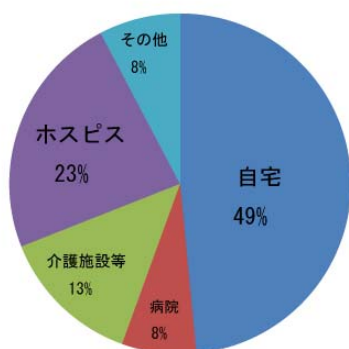
### 3. 自らが介護される場合について

「家族の手を借りずに施設で」と考える人も多数

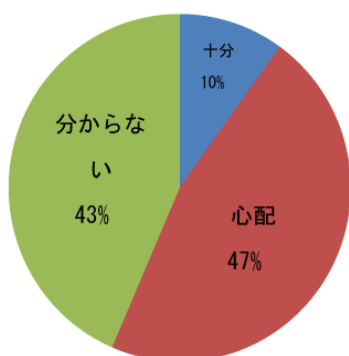
Q 自分が要介護になることを予測し、不安に思っていますか？



Q 自分が要介護の状態になった時、最期を迎えるのに希望する場所はどこですか？  
また誰に介護してもらいたいですか？



Q その場合の費用は？



自分自身が要介護状態になることに対しては、8割近くの方が「不安」と答えていました。また、最期を迎える場所については、「自宅」を希望する人が約半数を占め、次に「ホスピス」、「介護施設等」が続きました。誰に介護して欲しいか、という問いについては、「夫・妻」や「子供」が最も多く、一方で「その他」という回答も約3分の1を占めました。なお「その他」と回答した人には、希望する最期の場所を「介護施設」や「ホスピス」とする傾向が見られ、「最期は家族の手を借りずに施設で」と考えていることがうかがえます。

費用については「心配」が多くを占め、「わからない」を合わせると9割の人が、経

#### 4. 今、一番必要としていること(自由記載)

自らの老いや死と向き合うきっかけに

最後に、「今、あなたが一番必要としていること」を自由記載で挙げてもらいました。一連の回答からは、「ラストステージをどう生きるか悩んでいる」「誰が介護をしてくれるのか心配」など、自らが要介護状態になった場合の不安があらわれており、問題意識の高さ、切実さが伺えます。またそれに対して何を求めているか、さまざまな意見が寄せられました。以下、内容別に記載の一部を紹介していきます。

##### ●老後に対する不安の声

- ・迷惑にならない終末期を迎えたいが、どうしたらいいかわからない
- ・介護されたくない
- ・寝かされた老人、病人になるのが恐ろしい
- ・医療費の負担が年々増えている。年金生活となり、収入が少ないため今も医者にかかれない

このような不安に対し、解決のために何が必要と考えられているのでしょうか。多かったのは、制度の充実を求める意見や、医療や介護についての情報不足を指摘する意見、また、周囲の理解の必要性、経済的な問題解決などでした。

##### ●国の施策や制度、その他、行政等に求める在宅の体制づくり

- ・苦しい生活の上での介護は大変。各家庭の生活レベルを行政で十分に把握して、きちんとしてほしい
- ・独居老人が安心して最期を過ごせるような制度
- ・国の政策による福祉の充実
- ・家で最期を迎えられるシステム
- ・安心して老後を迎えるための介護等インフラの整備

##### ●「医療・介護」の提供体制などについて

- ・在宅で過ごしていても、緊急時には受け入れてくれる病院、あるいは相談できる人
- ・コミュニケーションのとれる医師になかなか出会えない
- ・金銭の心配をしないで受けられる医療
- ・在宅で過ごしていても、緊急時には受け入れてくれる病院、あるいは相談できる人

### ●周囲の理解、仲間を求める意見

- ・認知症という言葉は浸透したが、認知症に対する理解不足と偏見により、住みづらくなる人が多いことが辛い。制度ではまかないきれないところもあり、地域での協力が必要。
- ・介護者の気持ちをケアマネージャーに理解してもらい、協力してもらいたい
- ・介護する側、される側の双方が安心して暮らしていける地域づくり
- ・自分と同じような状況の方と、たまには不安なことなどをいろいろと話したい
- ・苦しみをわかちあう友、見守ってくれる、あるいはほんの少し助けてくれる家族
- ・地域の人とのかかわりが全くないので、コミュニティなどあれば参加したい
- ・要介護状態であっても介護に携わることが可能なら、グループホームなどで共生していきたい。そのための情報

### ●情報を求める意見

- ・介護サービスの内容を、一般の人でも理解しやすいように示して欲しい
- ・ターミナルケアを進めているすべての関係機関、ボランティア等の情報
- ・公的介護をどのような手順と仕組みで受けることができるのか、案内が欲しい
- ・ホスピスのよいところを今のうちに見つけておきたいが、資料が少ない

このほか、信頼できる病院や介護施設の必要性、医師不足の解消、医療の連携、住宅改修の必要性などが挙げられました。また、多かったのは老後の独居生活への不安で、「一人暮らしのため何が起きるか心配」などの声が非常に多く寄せられました。

一方では、「死ぬことの辛さがわかって苦しい」といった声、あるいは「自宅でも看取れることを知った」、「どう死ぬかはどう生きるかということ。自分の死について考えたい」といった声もあり、市民講座が自らの老いや死、看取りを考えるひとつのきっかけになっていることがわかります。

今回のアンケートからは、自分自身の最期について「自宅で家族に看取られたい」という考えと、迷惑をかけたくないという思いから「家族の手を借りずに最期は施設で」という考えとに、大きく二極化していることが窺えました。いずれが最良かは個人の判断とはいえ、まずは自らの老いや死に正面から向き合い、自らのあり方を考えることが、長寿社会をよりよく生きる第一歩です。そのための啓蒙、そして情報発信の意味でも、市民講座は非常に重要な役割を担っていると言えます。